

近くの山の木で 家をつくる意味

江鳩 景子 Writen by Keiko Ebato • NPO法人緑の列島ネットワーク理事

「森の同義語としての山の圧倒的存在と、人と山が共存する地帯としての田んぼと畑の連続」

先日、欧州より日本を訪れた知人は、電車や車で旅し、日本の風景の印象をこう語ってくれた。自然環境の減少や里山の荒廃などが叫ばれて久しいが、日本には先進国にも関わらず、驚くほど豊かな自然が残されている。また知人は桂離宮や伊勢神宮なども観光したが、「なるほどこのすぐれた木造建築は、豊かな森林や自然がなくては育めない」と納得していた。このような話を聞くたびに、私は日本人であることを誇りに思う。

私たち日本人のDNAの中には、森と共に生き、文化を生み出し、それを脈々と継承してきた歴史が深く組み込まれ、現代を生きる私たちの生活の様々な場面で表れる。その一つが、住宅を建設する時である。日本人の83.2%が、住まいを建てる時に木造を希望しているとの調査(※1)がある。日本では、東京のような大都市からでさえも車で1時間も走れば、緑豊かな風景が広がり、家族や親戚が山を持っているという話も珍しくない。「都心から近いのだから、東京の山の木を使って家を建てたい」とか、「家を建てる時は、おじいさんの山の木を使おう」とか考えるのは当然だ。しかし、この当たり前な要望の実現が、たいへん難しいものになってしまっている。山の木を伐ったり、地域の木で家を建てるのに誰に頼んでよいのか分からず立ち往生してしまうのだ。今まさに手を触れている木で家を建てるよりも、電

話でカタログを取り寄せて、新建材や外材で家を建てるほうが、はるかに簡単になってしまっているのだ。

なぜ地域の木を使って家をつくることが、これほどまでに難しくなってしまったのだろうか？ かつて山の木は、その地域の人の手で伐られ、隣組をはじめとした「結」の仕組みで、お互いに助け合って建てられていた。過疎化や高齢化のため、このような仕組みも激減し、そのノウハウは継承されていない。また山の木の伐採・製材から建築に至るまでのチェーンも、安い外材の台頭によって崩れてしまった。そして、結果として木材自給率は2割を切り(※2)、山に手が入らず、ビール瓶のような細い木が立ち並ぶようになってしまったのだ。

『近くの山の木で家をつくる運動』は、このような状況を憂い、私たちにとって一番身近なマテリアルである木を使って家づくりをすることで、木材チェーンを活性化し、山に活力を与え、さらに地域経済を再生し、そしてそのことで、地域の木を使つての家づくりが当たり前になるようなサイクルをつくりたいという思いから始まっている。

この運動は1999年に産声を上げたが、当時は木を伐るということに「悪い」という風潮があった。確かに、日本の中にも原生林はあり、伐つてはならない、人間の手を加えてはならない森はある。しか

しながら、日本では縄文時代から、伐って使い、そして植えることを繰り返してきた。このサイクルは、人間が手を入れ続けることで守られる自然環境である。

人間が山に手を入れ、それを家づくりに生かし、住宅として新たな生命を吹き込むことで山と木を結ぶサイクルをつくる、それがこの『近くの山の木で家をつくる運動』だ。

呼びかけから10年が経ち、このような山と家とのサイクルをつくらうという志を持ったグループが、全国各地で活発な活動をおこなっている。大工・建築家・林業家・住まい手など、グループのメンバーは様々だが、地域の木を使用した独自の木材チェーンを構築して、長寿命の家づくりをしている。各グループは、つくり

手だけの思いだけではなく、住まい手（お施主さん）にも、同じ思いを共有してほしいと、様々な企画を行っている。その中の一つに、自分の家の柱や梁に使用する木の伐採に立ち会うというものがある。

「伐採にお施主さんが立ち会うことで、年月をかけて育ってきた木の第1の“生命”が終わる瞬間を共有し、第2の“生命”に対して責任と愛情を持つてほしい」と、企画する建築家の一人は、その趣旨を語る。また実際に伐採する木を建築家・大工、林業家が一緒に選ぶことで、より無駄のない使い方ができるという。お施主さんにとつては、自分の家の柱や梁となる特別な木を選ぶ場面に立ち会うことができる貴重な機会だ。

大黒柱や梁に使うような木の高さは30m近くになり、そのような木の伐採には「神聖」という言葉がぴったりとあてはまる。木にチェー



伐採前にお神酒を捧げ、柏手を打つお施主さん一家

ンソーが入ると、しつかりと大地に根を下ろしていた木の枝葉が少しずつ揺れ始め、段々と揺れが大きくなり、メリメリという音と共に、地を叩くように木が倒れる。伐採した後は、しばらくの静寂があたりを包み込むほどだ。

実際に伐採に立ち会ったお施主さんの声を紹介したい。「2〜3カ月で建つ家ではなく、産地や生産者の顔が見える関係のありがたさを感じた」。「木が倒れるところをみて、身の引き締まる思いだった。自分の人生より長く生きている木の命に感謝し、この思いを子供たちにも受け継いでもらえるように教えたい」。実際に使用する木の伐採に立ち会うことは、家への思い、山への思いを強くする。

『近くの山の木で家をつくる』、それは、家をつくることを最終目的としない。山を再生し、木に新しい命を与え、子供たち（もちろん大人も）の心身を成長させる。このような家づくりが当たり前になり、山と家・生命をつなぐサイクルが当たり前になること、それが私たちの目標だ。

（※1）内閣府「森林と生活に関する世論調査」（2007年5月実施）より

（※2）木材自給率は、2000年に18.2%まで落ち込む。現在は回復傾向にある。

林野庁編「平成20年森林・林業白書」他より

江嶋 景子（えばと・けいこ）

NPO法人緑の列島ネットワーク理事、建築・林業・環境技術分野のコンサルティングを業務とする株式会社江真コンサルティング代表取締役。

CEL